

リアルハザードマップの概要

リアルハザードマップとは

- 住民が日常の生活空間において、ハザードマップに示された災害リスク（洪水・内水氾濫・高潮など）を実感できるように、市町村・自主防災組織が、居住地域の建物や電柱などに想定浸水深や避難所等を明示する標識を整備し、ハザードマップを可視化すること。

目的・効果

- リアルハザードマップにより、住民が居住地区の災害リスクを実感するとともに、「自分の命は自分で守る（自助）」意識や「地域ぐるみで命を守る（共助）」意識が醸成され、平時の個人による災害への備えや地区の防災活動の積極化を促す。
- 大雨や台風が近づいている場合などに、日常の生活の中で、リアルハザードマップを見て災害リスクを確認できるため、住民による早めの避難行動につながる。

<リアルハザードマップイメージ(想定浸水深)>



リアルハザードマップの整備推進

- 市町村・自主防災組織が使用することのできる災害種別一般図記号を用いた標識デザイン（くまモンを配置し、目を引くデザイン）を作成。

【8種類；想定浸水深（洪水、内水氾濫、高潮、津波）、実績浸水深、避難所、土石流注意、地滑り注意】

<(例)想定浸水深(洪水)>



<(例)避難所>



<(例)土石流注意>



リアルハザードマップ活用事例

多良木町

- 想定浸水深の標識
- 表示内容
この場所は、球磨川が氾濫すると5.0m浸水する可能性があります。

【ポイント】

- 千年に一度の大雨で想定される浸水深を示した標識を設置。
- 想定浸水深の高さには赤いラインを貼った。



- 多良木町では、球磨川兩岸の地域などに浸水深標識を整備。

球磨村

- 実績浸水深の標識
- 表示内容
この場所は、令和2年7月豪雨により3.1mの高さまで浸水しました。

【ポイント】

- 過去の災害(令和2年7月豪雨)で浸水した実績をもとに、標識を設置。
- 災害の記憶を伝える(風化させない)取組み。



- 球磨村では、令和2年7月豪雨で被害を受けた地域などに浸水深標識を整備。

宇城市

- 避難所の標識
- 表示内容
災害が発生したとき避難所として開設されます。

【ポイント】

- 道路沿いの支柱に避難の方向、避難所の情報を示した標識を設置。
- ライトで照らされると、夜間でも明るく表示される。



- 宇城市では、道路沿いの支柱や街灯などに避難所標識を整備。